謎と疑問を検証する ⑦

坂本龍馬などの志士はなぜ霊山に祀られているのか

高野澄著『幕末京都』より

●作家 高野 澄

龍馬いのち

「日本国は世界万国の総本国なり、否、天皇は地球上の総統におわします」

石見津和野藩（島根県鹿足郡津和野町）の「養老館」は率先して洋学をとりいれた先進的な藩校だったが、尊皇攘夷の学者や藩士が藩の指導権をにぎると、藩校もまた尊攘一色になった。

先頭にたっていたのが福羽美静で、福羽の師匠にあたる大国隆正は京都で「報本学舎」を開いて尊攘思想をひろめていた。「天皇は地球上の総統」とは、その大国隆正の言葉である。

文久二年（一八六二）の正月に福羽は京都の霊明神社で、殉難した尊攘志士の合同慰霊祭を開いた。これが京都護国神社（東山区）、別名を霊山護国神社ともいい、もっと古くは京都招魂社ともいっていた神社と墓地のはじまりである。

ここには、坂本龍馬（写真左）や中岡慎太郎（写真右）をはじめ、幕末の倒幕運動に参加して途中で倒れた志士の墓がずらりとならんでいる。

なかでも龍馬の墓石には色あざやかな千羽鶴の束がいくつもかけられ、壮観といった感じになっている。寄進される瓦の裏に「龍馬いのち！」などと墨痕あざやかに書かれているのには、ギョッとする人もいるだろう。

福羽美静の狙い

なぜ、ここが殉難志士の霊場になったのかというと、話は文化六年（一八〇九）にさかのぼる。

このあたりの山を「霊鷲山」といって、時宗の「霊山正法寺」が広大な寺域をしめていた。文化六年に村上都愷（としやす）という神道家が正法寺の塔頭の清林庵の敷地の一部を買いもとめて、神道による葬祭の場をつくった。葬祭の場を中心にしてできたのが「霊明神社」だ。

徳川幕府は仏教を手厚く保護、かつ厳しく監督していた。神道はそれにおされて沈滞していたが、まずこのように神道形式の葬祭をおこなうことで復活の展望をつかんだわけだ。

津和野藩で盛んだった尊皇攘夷の思想を倒幕運動のなかに盛り込もうと意気込んで上京してきた福羽美静は、霊明神社の神道祭に目をつけた。

安政の大獄などを経験している尊攘派からは多数の殉難志士を出している、まず彼ら先輩の慰霊をおこなうことから運動をはじめよう、というのが福羽の狙いになった。

それから一年ほどは尊攘派の上げ潮の時期である。

文久三年（一八六三）正月には、上京する将軍家茂を尊攘の大声で出迎えておどろかせてやろうという計画を練るために、霊明神社からすこし西の貸席「翠紅館」で諸藩諸派の志士の合同大決起集会が開かれた。

諸藩のなかで尊攘運動のリーダーシップをにぎっているのは長州藩だが、その長州からは若殿様の毛利定広（のち元徳）までも出席して志士を激励したのだから、翠紅館における志士集会の規模の大きさと意義がわかる。

東山安井のバス停から東にまっすぐに向かう道が護国神社の参道だが、ちかごろは「維新の道」の通称もある。なかごろの右手に「翠紅館跡」の標識が立っている。

ここから護国神社まではほんの数分の距離だが、そのことが、「志士の大集会がなぜ翠紅館で開かれたのか」の問にたいする答になっている。

ちょうど一年前に福羽が殉難志士の慰霊祭をおこなってからというもの、霊明神社は尊攘派の聖地のような場所になってきている。

霊明神社のすぐ近くの翠紅館で開かれる尊攘志士の大集会は、非業にたおれた先輩志士の聖なる霊に守られて安全と成果を保障してくれるにちがいない。

だからこそ翠紅館が集会の場所に選ばれたのだ。幕府役人の警戒の目をかすめるのに都合がいいといったことよりもなによりも、霊明神社に近いという積極的な理由があってのことだった。

霊明神社は正法寺という寺院の一角に誕生したのだが、翠紅館もまた正法寺の子院の東光院ゆかりの建物である。

東光院の寮のひとつが眺望のいいところから「叔阿弥」という貸席になったが、経営にゆきづまって西本願寺の手にうつり、翠紅館と名をかえて貸席と料理屋をかねていた。

霊明神社といい、翠紅館といい、仏教と徳川幕府の衰退、神道と尊攘派の隆盛という時代の趨勢を先取りして象徴しているようなところがある。ここにこそ、明治政府が仏教を排して神道の精神を政治の柱に採用してゆく基礎が条件づけられているのである。

「忠義」を顕彰する

文久二年（一六六二）に福羽美静が霊明神社で殉難志士の慰霊祭をおこない、翌年に翠紅館で尊攘志士の合同決起集会がおこなわれてからは、新しく殉難する尊攘志士の霊は神道形式による葬祭を経て霊明神社に葬られることがしきたりになった。

当然ながら、ここには尊攘派の敵対勢力の霊は祀られないのである。かれらは正義の実現にたいする妨害者なのだから、唯一の正しい宗教の神道で葬られる資格はない、という理屈が生まれた。

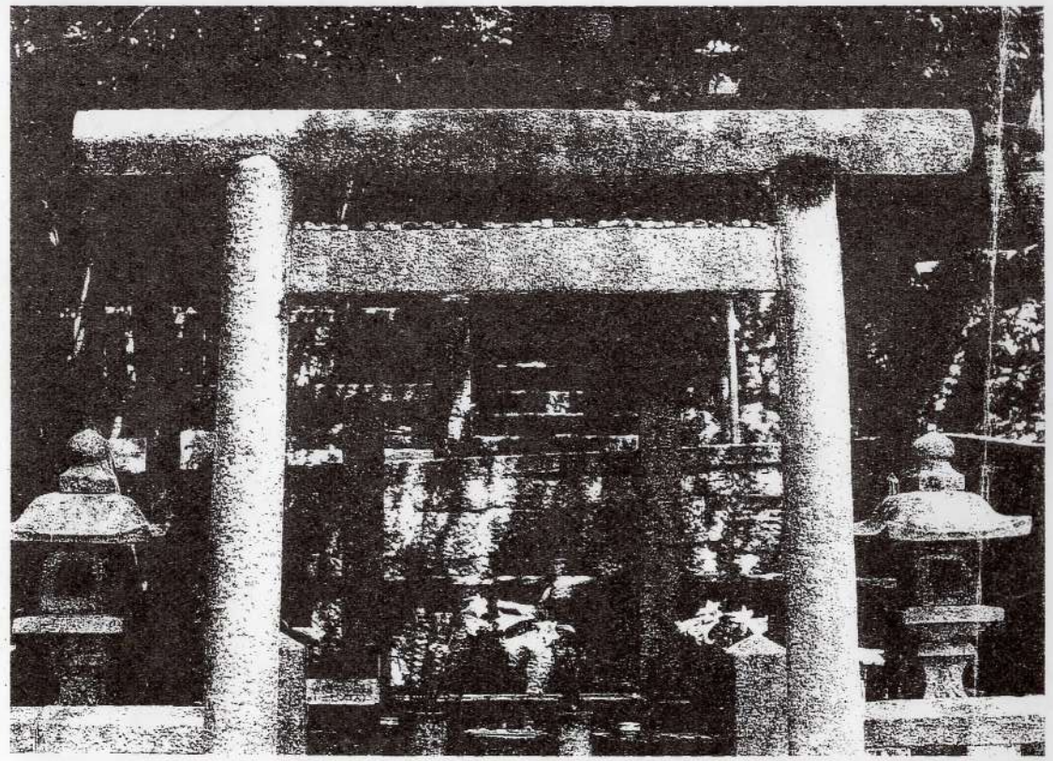
倒幕運動に殉じたものが正義の士であり、したがって神道の精神に合致する、そうでないものは神道から除外されるという基準がここから生まれてきた。

慶応四年（明治元年＝一八六八）五月十日に、政府は霊明神社の墓地に招魂社を建てることにした。「癸丑（嘉永六年＝一八五三）以来の殉難者の霊」と「伏見戦争以後の戦死者の霊」をあわせて祀るものだとされた。

江戸の上野の山にたてこもった彰義隊にたいして官軍が殲滅作戦にとりかかるときだから、多数の戦死者の出ることが予想されていた。あらかじめ、

「たとえ戦死しても京都招魂社に霊を祀って忠義を顕彰する、安心して死んでくれ」

と説得する効果があったのだ。



坂本龍馬と中岡慎太郎の墓　霊山はいわゆる東山三十六峰の一つ。二人の近くには古高俊太郎や吉村寅太郎などの墓塔も見られる。